

五味川純平『人間の條件』に関する序論的考察

高橋啓太

# 五味川純平『人間の條件』に関する序論的考察

高橋 啓 太

## はじめに

五味川純平の『人間の條件』は、一九五六年七月に三一書房の三一新書から書き下ろしの形で第一部が刊行され、一九五八年一月刊行の第六部で完結した大長編であり、戦後空前のベストセラー小説である。しかし、五味川の助手を務めていた澤地久枝は、近年の佐高信との対談の中で「今では、五味川さんはやはり、忘れられた作家なのでしょうか」という佐高の問いかけに対して、「残念ながら、そう言っていないと思います」と答えている。<sup>(1)</sup>

『人間の條件』は日本の植民地支配、日本の軍隊（内務班）、戦後の引揚げを描いたテクストであるが、近年の近現代史研究の領域を中心とした再評価が行われるまで、研究の面でも「忘れられた」テクストであった。また、多くの同時代評があるが、エンターテインメント性の高い内容であるた

めか、文壇から評価されることはなかった。ただ、拡大するジャーナリズムの市場の中で文学が消費され、「文壇」の崩壊（十返肇）をめぐる議論が起きていた時期に『人間の條件』がベストセラーとなったことは注目に値する。というのも、一九五〇年代は『人間の条件』以外にも、新人作家のベストセラー小説が多数誕生したからである。全く無名の五味川がベストセラー作家になったという現象を、同時代の文壇を取り巻く状況との関わりから考察する余地があるのではないだろうか。

本稿では、『人間の条件』の物語分析は一切行わず、ベストセラーとなった経緯や先行研究を整理することに集中する。第一節では、全く無名の存在であった五味川の『人間の条件』がどのように出版に至り、ベストセラーとなったのかを確認する。第二節では同時代評を、第三節では近年の再評

価を確認する。第四節では、文壇とジャーナリズムをめぐる同時代のコンテクストの中に『人間の條件』のベストセラー化という現象を置き直すことを試みる。

## 一、五味川淳平時代

五味川純平（本名・栗田茂）は一九一六年、満州の大連に生まれた。東京商科大学（現一橋大学）に入学するが中退し、東京外国語学校（現東京外国語大学）へ入学した。同校卒業後、満州へ戻って昭和製鋼所に就職する。一九四四年に同地で応召し、一九四五年八月、侵攻してきたソ連軍との戦闘で所属部隊がほぼ全滅し、捕虜となる。

五味川はのちに、ソ連軍との戦闘の最中、「タコツボの中で、そのとき私はキャラメルをしゃぶっていた。〔中略〕もしも生きのびられるとしたら、それは、この日に至るまでのことを書きしるすために思われた」と語っている<sup>②</sup>。自身の満州での戦争体験を基にして書かれたのが、『人間の條件』なのである。以下、小林修によるあらすじを引用する。

満州の軍需産業に勤める梶は、恋人の美千子と結婚し、招集免除という特典と引き換えに鉱山の労務班長として

赴任する。そこで彼は酷使される中国人鉱夫や特殊工人（捕虜）の待遇改善に心血を注ぐ。しかし特殊工人の不当な処刑に抗議し憲兵と対立、激しい拷問を受け軍隊に送られる。ソ満国境に近い部隊の過酷な軍隊生活の中で、不条理に必死で抵抗、人間の尊厳を貫こうとする。しかし戦局は悪化し遂にソ連軍が国境を越えた。梶は新兵と共に貧弱な武器で圧倒的な戦車隊に立ち向かうが全滅する。梶は敗残兵として満州の荒野を転々と逃亡する。飢餓や敵兵に苦しみながら生きるために数々の殺戮を繰り返す。やがてソ連軍の捕虜となるが、妻のもとに帰るため一人脱走し、幽鬼のように酷寒の地をさまよう。美千子の幻影を見ながら力尽きて倒れた梶の上に雪が降り積もる<sup>③</sup>。

五味川は一九四七年に日本に引揚げている。一九五六年に『人間の条件』を刊行するまでの創作活動に関しては、後の清水崑との対談の中で、「昭和二十五年」に「家族裁判」という短編を「別冊週刊朝日の懸賞ユーモア小説募集に応募してはじめて活字になった」と述べている<sup>④</sup>。詳細を説明すると、五味川は『週刊朝日』（一九五〇・六・一一）に募集要項

が掲載された「百万円懸賞「百万人の小説」に「家族裁判」を応募し、一等の特選に次ぐ優賞（「ユーモア小説」部門）となったのである。<sup>5)</sup> 同作は、一九五一年六月刊行の同誌夏季増刊号に掲載された（審査結果は一九五〇年一月二十四日号に掲載）。ただし、この時には「五味川淳」というペンネームを使っている。

管見の限り、五味川も五味川を取り上げた論者も全く言及していないが「五味川淳」はその後も世界社刊行の『富士』に「家出娘」（第四巻第一〇号、一九五一・一〇）、「盲氏神」（第五巻第一号、一九五二・二）、「キングコング製造会社」（第五巻第五号、一九五二・四）という短編を発表している（これら以外の著作は確認できなかった）。しかし、生活は困窮を極めていたようで、『人間の条件』の原稿は「生活を、やす恵夫人のミシン内職に支えられて、電話もない四畳半二間のアパートで、夜を徹しての執筆だった」という。ペンネームを変えた理由は定かではないが、ベストセラー作家となる前に、「五味川淳」として創作活動を行っていた無名時代があったのである。

## 二、『人間の条件』の刊行とベストセラー化

『人間の条件』は、すぐに出版が決まったわけではない。五味川が書き上げた原稿（第一部・第二部）は、劇団民芸の友人早川昭二を介して理論社の社長小宮山量平の手に渡ったが出版には至らず、やがて三二書房の編集部長竹村一のもとに回ってきた。塩澤実信によると、竹村は「かねてから純文学」と大衆文学に腑分けをする日本の文壇のあり方に、疑問を持っており、「文学を二分する腑分けに反撥する気持ちから、そのどちらでもない（大人の心に訴える、スケールの大きな面白い作品）を待望し、探し求めている」<sup>7)</sup>。竹村にとって、『人間の条件』はこの要求を満たすテキストであり、三二新書から書き下ろし作品としての刊行を決断した。とはいえ、『人間の条件』はすぐにベストセラーとなつたわけではない。完結編の第六部刊行後の『週刊朝日』一九五八年二月一六日号の巻頭で「隠れたベスト・セラー『人間の条件』と題した七ページにわたる特集が組まれたことで、大衆的な人気を獲得するようになったのである（図1）。同特集のリード文には「この一年間ですでに十九万部売れ、しかも尻上がりに版を重ねているという」という記述がある。すでに一定の売り上げはあったわけだが、この特集



(図1)

が組まれた『週刊朝日』刊行後の『読売新聞』紙上の広告を追っていくと、「堂々九〇万部突破」（二九五八・四・九朝刊、一頁）、「ついに一七〇万部突破!!」（同年八・一三朝刊、一頁）、「堂々二四〇万部突破 新記録を樹立」（同年一二・二朝刊、二頁）というように、部数が増していることがわかる。各広告の部数はそれぞれ全土六部（六冊）の合計であるが、爆発的な売れ行きを記録したことに変わりはない。実際、五味川は一九五八年に一五七四万円を納税し、長者番付の作家部門で一位となっている。

当時の『週刊朝日』編集長であった扇谷正造は、この特集

を組むに至った経緯について語っている。それによると、きっかけは同誌書評欄の打ち合わせの席で、白井吉見が「有馬稲子がその本を読み、ひどく感心し」と話したことである。「そのころ三〇人近くいた編集部員で、だれ一人、その時は、まだ読んでいなかった」が、「男女、年齢別々に五人の編集部員が読」み、異口同音に「面白い、迫力がある」と感想を述べたことで特集が決定した。三一書房での刊行決定と同様に、物語の面白さが認められて『人間の条件』は取り上げられたわけである。

『週刊朝日』は戦前（一九三二年）の創刊だが、一九五〇年代には『週刊新潮』（二九五六年）、『週刊女性』（主婦と生活社、一九五七年）、『女性自身』（光文社、一九五八年）などが創刊され、週刊誌ブームが到来していた。一九五八年の『週刊朝日』の発行部数は一五三万部であった。『人間の条件』のベストセラー化は、同誌での特集なくしては不可能であったろう。

ベストセラーとなった後のメディアの動きは早く、一九五八年のうちに舞台化・映画化が決定している。同年九月には、芸術座で舞台公演が始まった。小林正樹監督による映画（松竹、全六部）の撮影も同時期に開始され、翌

一九五九年から一九六一年にかけて公開された。さらに、大衆的な人気の広がりを示す次のような事例もある。労働者教育協会編集の『学習の友』（第五四巻、一九五八・四）には、五味川と横浜生糸検査所サークルのメンバーとの座談会「人間の条件を読んで」が掲載された。五味川本人が自作の感想を聞くという企画である。旺文社刊行の教育雑誌『高校時代』には、一九五九年四月号から三回にわたって「名作ダイジェスト」と題した『人間の条件』の詳細なあらすじが挿絵入りで掲載された。

### 三、同時代評

五味川は『人間の条件』の「まえがき」でこう述べている。

何を書くにしても、それが物語であるならば、面白くなければならぬ、という観念から私は離れられない——面白く書けたかどうかは別にして。私がここで云う面白さは、練達の文学者達からは「通俗」だと誹謗されそうな面白さである。もし大衆の健康な欲望が求め、親しみ易いと感じる面白さがそういうところにあるのだとしたら、私はそれを探したい。<sup>12)</sup>

五味川純平『人間の条件』に関する序論的考察

『人間の条件』は、概ねこの五味川の狙い通りに読まれたテキストであると言える。臼井吉見は、『週刊朝日』の特集に掲載された「ついに出た戦争文学——人間の条件」を読んだの中で「現代小説には、本来の意味でのヒーロー（英雄）が登場することはきわめてすくない。はつきりした性格なり、個性なりのもちぬしとしての主人公の活躍するような現代小説は、通俗的な読みものとは別として、ほとんどないといつていいだろう」と述べたのに続けて、「人間の条件」の主人公梶は、まさに現代の英雄ともいうべき人物である。筆舌を絶する危険と困難のなかで、つねに人間として生きつづけることを念願し、行動する人物として登場する。「中略」こういう主人公を、敗戦前後の満州という歴史的な舞台上に登場させることによつて、作者は、日本民族にとつて、のつびきならぬ積極的な主題を存分に展開することに成功した」と「面白さ」を高く評価している。<sup>13)</sup>

しかしながら、その後に発表されることになる同時代評において、『人間の条件』は五味川自身が「通俗」だと誹謗されそう」と危惧していた通りに読まれていたと言わざるを得ない。例えば、「第六部」だけ読んでみた」という大岡昇平は「題材自身に張りがあり、筆もそれに伴って、巧まらずして

読ませるようになっていゝことを強調し、「いかにもこゝで作者が主人公梶に持たせている思想や反省は、お粗末なものだが、一体作家というものは、そんなものはほどほどのところでいいのである」と擁護とも言えない形で評している。<sup>(14)</sup> 杉浦明平は「人間の条件」について、注文はいくらでもつけられようし、また、その手法の古さや通俗性を指摘することは容易だろうが、「この小説のなかにあるロマンチズムの大衆性などをもっと虚心をもって考える必要があるのではなからうか」と大岡の言うところの「お粗末」さを認めながら、受容の問題に目を向けようとしている。<sup>(15)</sup>

明確な批判を展開したのは村上兵衛と堀秀彦の二人である。村上は「作品はしばしば作者の意図を超え、あるいは作者の意図を裏切る。それが文学作品であり、作家の才能である。『人間の条件』は、作者の善良な意図に背くことなく、いわばその意図と釣合うことによつてすぐれた啓蒙書とはなつたが、文学作品に昇華することはなかつた」と批判している。堀秀彦は、『人間の条件』が「暴虐な権力と組織に対する怒りと個人的な抵抗、それにもかかわらず結局は無力な自分、その自分に対する歯ぎしり——こういった人間感情を軍隊と戦場という場面におり込んだ大衆小説」で、「その主人

公が人間としては観念的に描かれている」と指摘している。<sup>(16)</sup>

次に、肯定的あるいは好意的な同時代評である。桜井増雄は、『人間の条件』は「人間愛の至高を希求する精神が、合理的な社会組織の中で、いかにゆがめられ、悪戦苦闘をつづけてゆくか——という、すなわち一粒の「抵抗」<sup>(17)</sup>をあつかつた作品であり、かつ又、まれにみる至難な夫婦愛の小説である」<sup>(18)</sup>（ルビ原文）と評価する。「不合理な社会組織」における個人の「苦闘」に注目したのは高杉一郎も同様で、「私たちが見おとしてはいけないことは、この小説がほとんどすべての若い読者のあいだで、一種の人生案内として読まれているという事実であり、日本の文学的伝統とつながるところはすくなく、かつ弱いかもしれぬが、同時代人の道德的な問題に答えるという文学の課題は——それがどの程度に形象化されているかは別にして——どの作品よりもよくはたしているわけである」と述べている。<sup>(19)</sup> また、中村英雄は「読者がこの作品から満足感をもって受けとっているものは、おそらく文学的感動であるよりも、むしろ倫理的感動だろうと思う」と指摘し、「主人公・梶において追求される知識人、ことに転向者の戦争責任の問題」を中心に物語を読んでいる。<sup>(20)</sup> 村上は『人間の条件』を「文学作品」未満の「啓蒙書」と評して

いたが、批判的ではないという立場の違いを別にすれば、桜井・高杉・中村も読み方はほぼ同様である。

『人間の條件』を戦争文学として評価する同時代評もある。

LON「中間小説評」(『読売新聞』一九五八・三・一・夕刊、三頁)は、「人間の条件」にはそれこそ、練達な、物語的技法がうかがえるが、主題の質は、いままで当然出るべくして出なかった戦争文学の骨格として、ほとんど完璧に近い」と抽象的な書き方ではあるが絶賛している。長谷川泉は「戦争にインテリゲンチアがどのように対処するか、戦場において人間を見失わないということは一体いかなることか、それを実践するためにはどのような苦難があり、それを切り抜けてゆくことがどのような姿をとり、そしてどんな結末になるか、ということ」を本格的なロマンに構成したものであり、

「この長篇のなかのどこかに、今まで読んださまざまな戦争文学のフラグメントを拾い出すことができる」という意味で、「戦後に書かれた多くの戦争文学の集大成」であると評している。<sup>(2)</sup>一九六〇年代に入ってからではあるが、竹内好は野間宏の『真空地帯』との比較を通して、「人間の条件」での軍隊は、日常性から連続している。というよりも、ここでは軍隊そのものが全体社会である。この軍隊が全体社会と重なり

合うという認識は、非常に重要であって、それを取り出したのはこの作品の不滅の功績だと私は思う<sup>(2)</sup>と評価している。第三部・四部で前景化する軍隊小説としての一面は、長谷川の指摘する「さまざまな戦争文学のフラグメント」の一つとみなして間違いない。

総じて同時代評では、梶が「現代の英雄」として描かれていることを通俗性として批判するのか、新しい文学の形として肯定するのかによって評価が分かれていたと言える。ただし、「一種の人生案内」、「文学的感動」と区別される「倫理的感動」といった評語から明らかのように、既成の文学とは異なるタイプの小説として読まれていた。『人間の条件』が文壇から黙殺された要因の一つはこの点にあるだろう。

#### 四、近年における再評価

二〇〇〇年代以降、『人間の条件』の再評価の兆しが見えている。それ以前には、『人間の条件』を三冊(第四六〜四八卷)に分けて収録した『日本文学全集』(河出書房、一九六七)の尾崎秀樹による解説「文学入門」(第四八卷)や、塩見鮮一郎による梶の思想の批判的再検討があるが、他には<sup>(3)</sup>学術誌の特集の中で、ベストセラーとなったことが文学史の



一事項として記載されている程度である。<sup>(24)</sup>近年発表された複数の論考では、物語の舞台が満州州であることや敗戦後の引揚げが描かれていることが注目され、戦争文学としての意義を見出そうと試みている。

川村湊は、「梶は、いわは、強者としての被害者 だった。しかし、「満州国」においては、日本人はほとんどが、弱者としての加害者」として存在していたのである。軍隊においても、一兵卒は、弱者としての加害者」として、中国人民と接していたはずなのだ」と述べ、梶が「強者」として会社や軍隊に対峙していく姿が、植民地における日本人の「加害者」性を希薄にしてしまうのと同時に、「その他の日本人、中国人、朝鮮人が同じように、弱者としての被害者」として描かれているところに、そうした戦後の日本人大衆の「歴史感情」に呼応するところがあると思われる」とベスト・セラーになった要因を推察している。<sup>(25)</sup>

近現代史研究の文脈からの再評価も行われている。成田龍一は「『人間の条件』は、こうして一九五〇年代後半に、中国を舞台にした物語のなかで、日本人と中国人という非対称的な関係が戦時／敗戦後に逆転することを軸に民族間のありようを描き出そうとした作品といえよう。五味川は帝国―植

民地に関わる問題系に接近していたのである」と戦中戦後を連続的に描いた物語である点に意義を見出し、さらに、第六部ではソ連に対する批判も垣間見えることから、「『人間の条件』がスターリン批判の一九五〇年代後半以降に綴られた作品であること」にも言及している。<sup>(26)</sup>『人間の条件』を軍隊小説として評価していた竹内もこの点に触れていた。今後、掘り下げて考察するべき問題である。

五十嵐恵邦はより具体的な物語分析を行い、「長編小説『人間の条件』は、中国そしてソ連を巻き込んだコロンニアルな視点を持った作品となり得たはずであった。しかし、そのような広大な舞台背景のなかにはじまったこの野心的な物語も、結局、日本人の、日本人による、日本人のための、がまん劇として幕を下ろす」のであり、「この物語に現れた中国人やロシア人という他者は、芝居の書き割りのようなものにならずに」と指摘する。<sup>(27)</sup>

戦中戦後を横断する『人間の条件』の長大な物語が、近現代史研究の領域における「帝国―植民地に関わる問題系」の前景化によって研究対象として浮上してきたことは明らかであろう。より最近でも、朴裕河が「引揚げ文学」というカテゴリーを設定して戦後文学再検討の必要性を主張する中で、

『人間の條件』について、「ある意味で引揚げできなかつた軍人の物語でもある」と述べている。<sup>28</sup>『人間の條件』の研究が、刊行から半世紀を過ぎてようやく進展したと言えるであろう。

同時代評の中では「文学作品」に満たない物語とみなされることが多かったが、近年の再評価の中ではそのような線引きは行われていない。それでも、川村や五十嵐は戦争文学としての意義を認めながらも、梶の人物造型や物語の展開上の問題を指摘せざるを得なかつた。今後は、文学研究の領域で『人間の條件』を戦争文学あるいは引揚げ文学として文学史的に位置付ける作業が求められるであろう。

## 五、一九五〇年代の新人作家たち

第一節で、『人間の條件』が文壇関係者を介することなく、三一書房から書き下ろし長編として刊行されたことを確認した。このことは、五味川が文壇の外から作家デビューを果たしたことを意味している。白井吉見や長谷川泉が同時代的に戦争文学として評価していたにもかかわらず、『人間の條件』ひいては五味川の存在が文壇に受け入れられることはなかつた。「五味川純平が、日本には珍しい書き下ろし専門の長編

小説作家としてスタートし、そうした位置を早々と確乎としたものにしたので、文芸雑誌や小説雑誌に読み切りの短編小説を書き、長編小説を連載してそれを単行本化するという文壇内の一般的な小説家のやり方を踏襲しなかつたために、いわゆる文壇、文芸ジャーナリズムの側が彼を受け入れがたかつたという事情があつたのかもしれない<sup>29</sup>という川村湊の指摘は妥当であろう。本節では川村の指摘を踏まえつつ、書き下ろし長編による作家デビューというあり方と一九五〇年代の他の新人作家のデビューとの相違点を明らかにしていきたい。

一九五〇年代前半、国民文学論争や日高六郎「文壇とジャーナリズム」（『岩波講座 文学』岩波書店、一九五三）の中で文壇の閉鎖性が指摘された。日高は「文壇の最大の欠点は、それがほとんど文壇人内部や、雑誌編集者などのつきあいの範囲を出ず、社会的国民的地盤から全く離れてしまつてゐることである」と指摘し、文壇の外部から新しい文学運動が起きることを期待していた。しかし、十返肇が「『文壇』の崩壊」（『中央公論』一九五六・一二）の中で「私や荒氏が『文壇』という名称で擁護したのは、いわば文学的ジャーナリズムの世界であり、日高氏が攻撃したのは古い概念による文壇であ

つて、当時すでにそれはもう殆ど実在していなかったとさえいえよう」と述べているように、文壇をめぐる議論は、文壇というコミュニティが「崩壊」していることを前提に展開されていく。つまり、文学はジャーナリズムの市場の中で流通していくものとして認識されていたのである。

そうした認識をもたらしたのが、当時一橋大学の学生であった石原慎太郎の「太陽の季節」(『文学界』一九五五・七)が同年下半年の芥川賞を受賞し、「太陽族」の登場という社会現象まで起きたことにあるのは言うまでもない。同作は芥川賞の前に、創設されたばかりの文学界新人賞も受賞している。実は、文芸雑誌の公募型新人賞はこの時期に相次いで誕生しており、一九五六年には中央公論新人賞が、一九五八年には群像新人文学賞が創設されている。このことはつまり、ジャーナリズムが主導的に新人作家を発掘するようになったことを意味する。この状況を目の当たりにしていた平田次三郎は、「いかに、過去のしきたりでは、芥川賞は同人雑誌作家から選ばれた。が、当節では、そのしきたりは通じない。『文学界新人賞』から芥川賞という石原慎太郎の例を見るがいい」と述べている。同人雑誌での地道な活動を経験しない新人作家が、ジャーナリズムの市場を介して文壇に登場する

ようになったのである。一九五六年に「檀山節考」(『中央公論』一九五六・一一)で第一回中央公論新人賞を受賞した深沢七郎も同様である。新人賞の審査員は作家や文芸評論家であり、新人賞を受賞することは自ずと文壇への入り口ともなる。十返が文壇とは「文学的ジャーナリズムの世界」であると述べていたことは、新人作家の文壇デビューに関しても妥当と言つてよいであろう。

一九五七年に『挽歌』(東都書房、一九五六)がベストセラーとなった原田康子は、北海道釧路市在住の新聞記者であり、単行本の長編小説で話題を呼んだという点で五味川と共通点が多い。一九五八年末の『読売新聞』紙上の「文壇10大ニュース」(一九五八・二・二十九日刊、四頁)の中で、「人間の条件」が「ベストセラーの条件(五味川純平「人間の条件」二百四十万部売れる)」と題して取り上げられた際には、前年に『挽歌』がベストセラーとなったことへの言及から「素人」ブームが到来するかもしれない」と書かれている。

しかし、原田の場合は『挽歌』刊行前の一九五四年、同人雑誌『北海文学』に掲載した「サピタの記憶」が『新潮』同人雑誌賞の最終候補に残り、伊藤藤整から評価を受けたことが『挽歌』刊行の布石となっていた。『挽歌』はガリ版刷り

の『北海文学』に連載されていたが、講談社は連載終了後に単行本として出版する話を持ちかけた。実際に発行したのは東都書房だが、同社は講談社系列の出版社である。文芸雑誌の文学賞（受賞はしなかったが）が、注目されるきっかけだったのである。さらに付け加えると、原田は『挽歌』で第八回（一九五六年度）女流文学者賞を受賞している。それ以前の受賞作は、第一回（一九四六年度）が平林たい子「かういふ女」（『展望』一九四六・一〇）、第三回（一九四八年度）が林美美子「晚菊」（『別冊文芸春秋』一九四八・一一）、『挽歌』が受賞した翌年の第九回（一九五七年度）は宇野千代「おはん」（中央公論社、一九五七）など錚々たる面々の代表作である。

『挽歌』がベストセラーとなる前年の一九五六年には、学生作家の藤島泰輔が話題となった。藤島は、学習院中等科以来一〇年に渡って学友だった皇太子（現上皇）をモデルにした長編『孤独の人』を同年四月に三笠書房から書き下ろして刊行している。特徴的なのはメディアの報道が刊行に先んじていた点で、『週刊朝日』一九五六年四月一五日号で特集が組まれたほか、『朝日新聞』にも「皇太子さまに青春を……小説『孤独の人』で抗議」（『朝日新聞』一九五六・四・二朝刊、七頁）という見出しの記事が掲載された。この記事のリード

文は「皇太子さまのいる教室の特異な生態を描いた小説が四月末東京の某書房から出版される」と始まっている。『人間の条件』と同じように文壇を介さずに世に出た作品ではあるが、「出版される」前から、その内容ゆえにスキャンダラスに取り上げられていたのである。

ここまで言及してきた各新人作家のテクストが、それぞれジャーナリズムの力によって大きく宣伝され話題となったことは確かであるが、『孤独の人』は別として、『人間の条件』のように文壇と全く接点のないまま発表ないしは刊行されたものはない。『孤独の人』も刊行前から話題になっていた点では『人間の条件』と異なっていた。

### おわりに

ここまで、『人間の条件』出版の経緯・同時代評・近年の再評価の動向を整理し、前節では同時代に登場した新人作家たちのデビューのあり方を五味川の場合と比較した。最後に、『人間の条件』研究の暫定的な方向性を提示するために前節の議論を補足しておきたい。荒正人は、新人作家の作品が次々とベストセラーを記録する中で、五味川についてこう述べている。

作者には失礼かもしれぬが、『人間の条件』は、音楽でいえば歌謡曲程度のものにすぎぬ。だが、この作品の質については、ここで論じる必要がない。私の言いたいのは、マス・コミが、或る作品をベスト・セラーズにえらび、その結果、その書き手を一人の新人として登録してしまふ作用である。新人というからには、これまでなかった新しい何ものかを持つてきた人でなければならぬ。五味川純平は、はたして新人の名に値するか。私の疑問にもかかわらず、マス・コミは、立派な新人としての待遇をしている。<sup>(36)</sup>

荒は引用部とは別の箇所、石原慎太郎を「新人」として取り上げている。荒の言う「新人」とは、文壇に入るに足ると認められた新人作家のことと理解できる。五味川はベストセラー作家になったが、荒は「新人」としては認めなかった。そういった立場が荒だけに限らなかったことは、同時代評の中でも文学作品としては評価されず、「すぐれた啓蒙書」「倫理的感動」「ロマンチズムの大衆性」といった言葉が用いられていた事実からも明らかであろう。五味川自身、文壇

との距離は自覚していたようで、『人間の条件』がベストセラーとなった一九五八年の佐古純一郎との対談では、「私は、文壇には全然関係ありません」「文壇のいわゆる玄人の立場——私は玄人の立場というものについてはたいへん疑問に思いますけれども——そういう立場から、あれは素人つばい、非文学の作品だと言われている」と語っている。<sup>(37)</sup>

文壇との距離に関しては、書き下ろし長編という出版形態の持つ意味を考える必要がある。田野辺黨は「出版社が無名の作品をいきなり単行本として刊行する冒険は、雑誌中心に栄えてきた既成文壇に対抗して、出版文壇ともいうべき新しい第二文壇を産み出そうという努力だという見方」があることに触れ、「原田康子の「挽歌」五味川純平「人間の条件」などでほとんど投機的といつていくくらいの成功を収めた」と続けている。<sup>(38)</sup>この田野辺の指摘は、当時における文学の需要と供給の問題と接続することができるかもしれない。需要については、「人間の条件」がマス・コミの誇大広告や人為的な売込み作戦とは別に、一般読者によつて押しあげられ、ブームをつくつたことは、当時の読者が既成文学の閉鎖性にあきて、新しい文学を求めたことと関係がある」という尾崎秀樹の指摘が示唆的である。供給については、『人間の条件』

刊行当時の三二書房の経営状況や出版戦略に目を向けることが課題となってくる。

### 注

- (1) 澤地久枝・佐高信「世代を超えて語り継ぎたい戦争文学」(岩波現代文庫、二〇一五) 三頁。
- (2) 「わが小説」(『朝日新聞』一九六一・一二・二五朝刊) 六頁。
- (3) 小林修「五味川純平 人間の条件」(『国文学 解釈と教材の研究』一九八五・九臨時増刊号) 五八頁。
- (4) 清水崑「話題の顔 スカッと男性的 五味川純平氏」(『朝日新聞』一九五八・一二・二二夕刊) 一頁。
- (5) 特選は深安地平「青春の旅」、時代小説部門で優賞に次ぐ入選だったのは松本清張「西郷札」であった。
- (6) 塩澤実信「三二書房と『人間の条件』」(『新装版 出版社の運命を決めたこの一冊』出版メディアアパル、二〇一二) 一四〇～一四一頁。
- (7) 注(6) 前掲書、一五〇頁。
- (8) 「昨年の長者番付」(『朝日新聞』一九五九・五・二朝刊) 一〇頁。
- (9) 以下の説明は、扇谷正造「五味川純平 人間の条件 現代的求道の書」(朝日新聞社編『ベストセラー物語 中』朝日選書、一九七八、七九頁) に拠った。
- (10) 注(9) 前掲書、七九頁、参照。
- (11) 『映画評論』(一九五八・一〇) には映画主演の仲代達矢と舞台主演の平田昭彦の対談「主役対談「人間の条件」について」が掲載され、『婦人生活』(一九五八・一一) には「劇と映画で競う人間の条件」(一七二～一七五頁) という、上段は「舞台裏のぞき」、下段は「映画小坂口ケダより」で構成される二段組みの記事が掲載された。当時の『人間の条件』の話題の大きさがうかがえる。
- (12) 「まえがき」(『五味川純平著作集』第一巻、三二書房、一九八四) 六頁。
- (13) 『週刊朝日』(一九五八・二・一六) 八～九頁。
- (14) 大岡昇平「人間の条件」の中身 ばかばかしさの中の真面目なもの 文芸時評⑤(『東京新聞』一九五八・三・二六夕刊)、曾根博義編『文藝時評大系 昭和篇Ⅱ』第十三巻(ゆまに書房、二〇〇八) 一一五～一二六頁。
- (15) 杉浦明平「文学のひろば」(『文学』一九五八・一〇) 一一一頁。

- (16) 村上兵衛「人間の条件」論——人生的感動と文学的感動と——」(『新日本文学』一九五八・六) 一五八頁。
- (17) 堀秀彦「西部劇『人間の条件』」(『新潮』一九五八・七) 六六頁。
- (18) 桜井増雄「快作『人間の条件』について」(『社会主義』第八四号、一九五八・八) 四三〜四四頁。
- (19) 高杉一郎「批評とはケチをつけることか」(『多喜二と百合子』第六卷第一号、一九五八・一〇) 三〇頁。
- (20) 中村英雄「『人間の条件』をめぐる」(『世界文学』第一七号、一九五八・一一) 九〜一〇頁。
- (21) 長谷川泉「戦争文学の系譜」(『近代日本文学——鑑賞と研究——』明治書院、一九五八) 二五三〜二五四頁。
- (22) 竹内好「五味川純平『人間の条件』解説」(『現代の文学』33 五味川純平集) 河出書房新社、一九六三)、竹内好全集『第一二巻(筑摩書房、一九八二) 三九一頁。
- (23) 塩見鮮一郎「『人間の条件』 梶ヒロイズムとその破産」(『創』一九七九・一〇)
- (24) 和泉あき「五味川純平の『人間の条件』」(『国文学 解釈と鑑賞』一九七二・七臨時増刊号)、渡部芳紀「編年体・近代文学二〇年史 昭和33年 1958」(『国文学 解釈と教材の研究』一九八五・五)、武田信明(編年体文学史) 戦後五十年 1958年(昭和33)」(『国文学 解釈と教材の研究』一九九五・七) など。
- (25) 川村湊「『人間の条件』(1956-1958) 五味川純平 (1916-1995) 語り継がれた植民地と戦争の『記憶』」(『現代思想』第三三巻第七号、二〇〇五・六) 一九七頁。
- (26) 成田龍一「『戦争経験』の戦後史——語られた体験/証言/記憶」(岩波書店、二〇一〇) 一三三〜一三四頁。
- (27) 五十嵐恵那「五味川純平と『人間の条件』」(『敗戦と戦後のあいだで 遅れて帰りし者たち』筑摩選書、二〇一一) 七七〜七八頁。
- (28) 朴裕河「『引揚げ文学』を考える」(『日本近代文学』第八七号、二〇一一・一一)、『引揚げ文学論序説——新たなポストコロニアルへ』(人文書院、二〇一六) 一五頁。
- (29) 注(25) 前掲論、一九七頁。
- (30) 日高六郎「文壇とジャーナリズム」(『岩波講座 文学』岩波書店、一九五三)、杉山光信編『日高六郎セレクション』(『岩波現代文庫、二〇一一) 三三三頁。
- (31) 十返肇「『文壇』の崩壊」(『中央公論』一九五六・一一)、

体・近代文学二〇年史 昭和33年 1958」(『国

『十返肇著作集 上』（講談社、一九六九）二九五頁。

二二二頁。

(32) 一九五〇年代の文壇とジャーナリズムに関する問題に

付記

引用に際して旧字体は適宜新字体に改めたが、『人間

については、拙稿「文学者」として生きるということ―

の条件』あるいは『人間の条件』の表記は各文献の表

―荒正人の文壇論に関する考察』（花園大学日本文学

記に従った。本稿は、二〇一九年度花園大学特別研究

論究』第二二号、二〇一九・一二）でも触れており、

助成の成果の一部である。

内容的に一部重複する部分があることを断っておく。

(33) 平田次三郎「同人雑誌の問題点」〔群像〕一九五七・六

一七七頁。

(34) 例えば、第一回文学界新人賞の審査員は伊藤整・井上靖・

武田泰淳・平野謙・吉田健一、第一回中央公論新人賞

の審査員は伊藤整・武田泰淳・三島由紀夫であった。

(35) 「女立志伝 私はこうして世に出た 原田康子さん」〔読

売新聞〕一九五七・九・四朝刊）五頁参照。

(36) 荒正人「マス・コミと新人」〔新日本文学〕一九五八・

一一）一四八―一四九頁。

(37) 五味川純平・佐古純一郎「対談」文学の条件」〔中央

公論〕一九五八・八）二二二頁。

(38) 田野辺薫「文芸時評」〔京都新聞〕一九五八・一一・

二二）、注（14）前掲書、四九〇頁。

(39) 尾崎秀樹「状況からの脱出」〔文芸〕一九六三・七）

五味川純平『人間の条件』に関する序論的考察